

干拓地農村の集落編成と高齢者意識

—岡山県玉野市南七区・東七区の事例—

石 阪 督 規

要旨：岡山平野の南部に位置する児島湾干拓地では、1960年以前に拓けたエリアとその後に拓けたエリアとで、集落構成が異なっている。たとえば、1960（昭和35）年竣工の岡山県玉野市南七区においては、個々の家屋ならびに耕地は等間隔に配置され、集落形式は「散居型」となっているのに対し、1963（昭和38）年に入植が開始された玉野市東七区では、居住地は数カ所に集められ、集落は耕地と居住地が別々に配分された「密居型」となっている。

本稿では、これら「散居型」集落の南七区と「密居型」集落の東七区それぞれに居住する65歳以上の高齢者（その多数が昭和30年代の「入植第一世代」である）を対象としたアンケート調査の結果をもとに、干拓地の集落形式が、高齢者の地域生活や家族構成、そして生活意識に及ぼす影響を、主として集落編成と近隣社会との関係性のあり方に着目しながら、明らかにしていくものである。

1. はじめに

岡山平野南部に位置する児島湾干拓地は、干拓年代、入植年代の違いによっていくつかのエリアに区分される。その中で、最も「あたらしい」干拓エリアが1963（昭和38）年竣工の「第七区」干拓地である。この「第七区」干拓地はさらに、「西七区」「北七区」「南七区」「東七区」の4つの地区に区分され、1964（昭和39）年、「西七区」「北七区」が児島郡灘崎町に、「南七区」「東七区」が玉野市に編入されている。（図1参照）

そもそもこの「第七区」干拓地で、最初に入植がはじまったのは灘崎町の「西七区」であり、1951（昭和26）～1956（昭和31）年の間に217戸が入植している。次いで1960（昭和35）年、玉野市の「南七区」に64戸が入植している。『灘崎町農業発達史』によれば、これら「両地区とも、疎居方式の形態が採用され、縦250m、横60mの長方形の耕地1.5haの内0.05haの宅地は道路に面して配置され60m間隔に整然と並ぶ⁽¹⁾とある。つまり、「西七区」「南七区」とともに、宅地を含む耕地が等間隔に道路に沿って並ぶ「散居型」の干拓地を形成しているのである。

他方、1963（昭和38）年の「北七区」と「東七区」への入植174戸には、一戸当たりの耕地配分面積が2.1ha（内宅地0.1ha）に拡大され、1圃区は5ha（500m×100m）に区分された。そして、「定住形式も、北、南七区と異なり、中央部に集め生活における交流も深められるように変化した」。⁽²⁾「北七区」と「東七区」では、宅地と耕地とを分けて、しかも宅地を一ヶ所に集中させる「密居型」の干拓地を形成しているのである。

このように、児島湾干拓地では、地区によって集落⁽³⁾の形態が異なっており、エリア内に「散居型」「密居型」双方の集落が混在しているのが特徴となっている。とくに「第七区」干拓地については、入植年代が昭和30年代とほぼ同時期でありながら形式の異なる集落が、隣接

して存立している。

本稿では、これらのなかで玉野市に属する2つの地区、すなわち「散居型」の干拓地である「南七区」と「密居型」干拓地の「東七区」それぞれに居住する65歳以上の高齢者を対象に実施したアンケート調査から、干拓地農村における高齢者の家族観や地域や近隣とのかかわり方

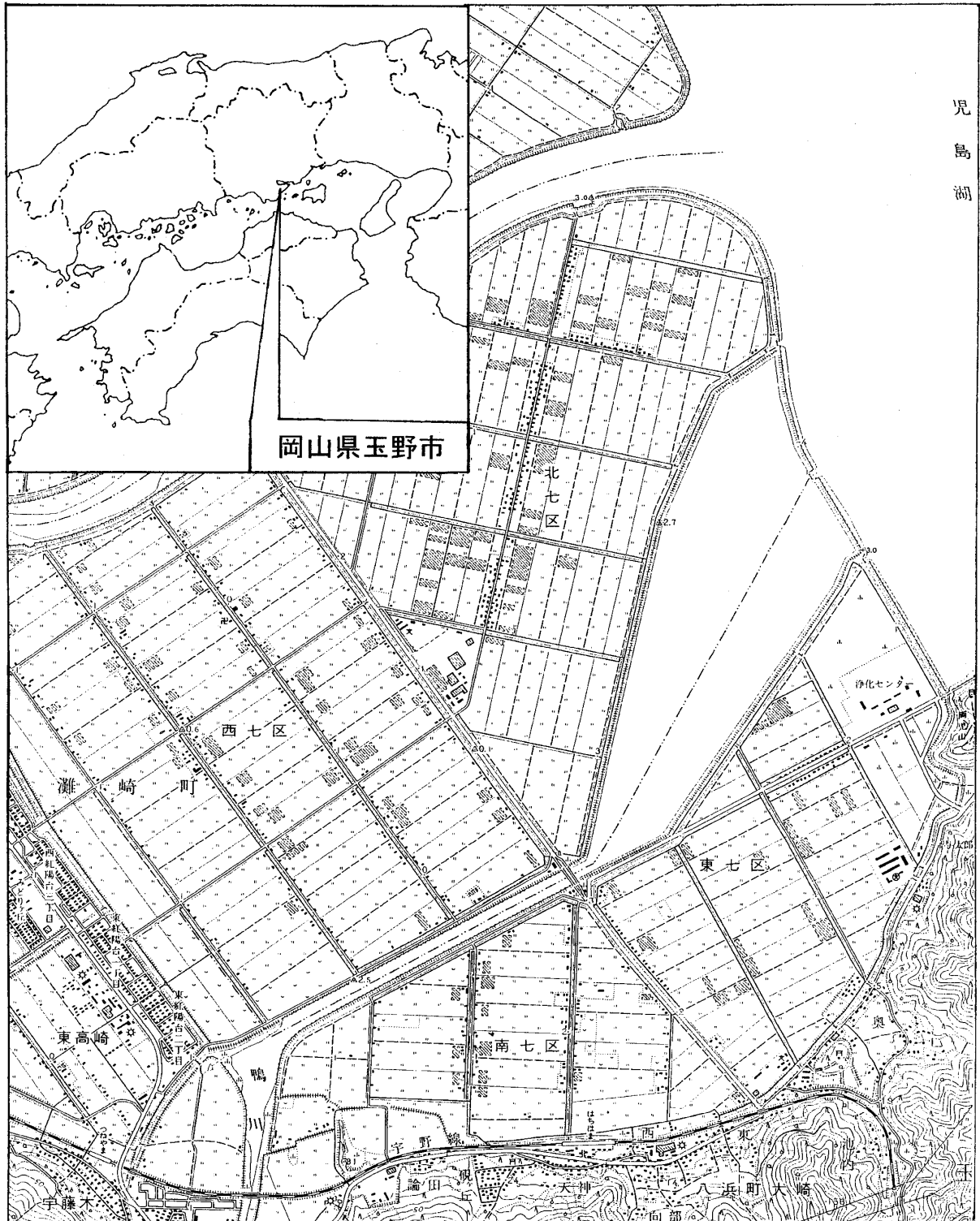


図1 第七区干拓地の位置

などの地域間偏差を明らかにする。そして、そこから、干拓地の集落形式が、高齢者の家族構成や地域生活にいかなる影響を及ぼすのかを、集落編成と近隣社会との関係性のあり方に着目しながら論じていくものである。

2. 対象地の概況と調査の方法

2-1. 岡山県玉野市の概況

調査対象地となる「第七区」干拓地の「南七区」と「東七区」の両地区は、岡山県玉野市の北部に位置している。玉野市は、岡山県の南端に位置し、沿岸一帯には屈曲した入江が多く、古くから良港として栄えた。1940（昭和15）年、宇野・日比両町が合併し県内第4の市として玉野市が誕生。今日まで周辺町村との合併を繰り返し、1998年現在では、面積103.43km²、人口は72,500人に達する。

玉野市は、1906（明治39）年の宇野港修築、ならびに1910（明治43）年の宇野線開通と宇高連絡船の就航以来、中四国を結ぶ海上交通の要衝となり、港湾都市として繁栄し、後には、杉山製銅所（現三井金属鉱業日比製煉所）や河村造船所（現三井造船玉野事業所）の建設により工業都市としての基盤も固めていった。しかし、2度にわたるオイルショックや円高不況、平成不況等の影響からこれらの基幹産業は振るわず、加えて1988（昭和63）年の瀬戸大橋開通にともなう宇高連絡船の廃止によって、交通体系が変化し、港湾機能も次第に縮小化されていった。近年、高次都市機能については岡山市に依存するところが大きく、また、東西44kmにおよぶ海岸線をいかした観光都市としての側面をも有している。^④

他方、市内の農業は、都市近郊型農業が主体となっている。第一次産業従事者の比率は3.7%（第二次39.7%、第三次56.6%）と少なく、1995年のセンサスでは、農家数1,537戸、農家人口6,220人、耕地面積は882haとなっている。市レベルで見れば、農家規模は他地域と比べても大きいとはいえず、それが兼業化率82.8%（第一種10.2%、第二種72.6%）という高い数字につながっている。また地区別には、たとえば山田、東兎地区で、スイートピーなどの花卉栽培、エンドウの施設化なども進められているが、市内の農業の中心は、干拓地農業であり、「第七区」干拓地においては、米麦を中心に、収益性の高い施設ナス、レンコン等が栽培され、ここでは、中核的農家を中心とした農業生産団地が形成されている。^⑤

2-2. 玉野市七区（「南七区」「東七区」）の概況

「第七区」干拓地で玉野市に属する「南七区」と「東七区」は、ともに昭和30年代の入植者がその多くを占める干拓地農村である。この地域は、入植以来、営農指導体制の整備、また入植第一世代の努力などによって、安定した水田経営を営んできた米麦作地帯であるが、近年では、転作作目として導入された施設ナスの栽培も盛んで、「米麦+ナス」という複合経営農家も増加している。

最近10年間の人口、農家戸数、農家人口の推移を示した表1によると、「南七区」「東七区」両地区で、世帯数、人口ともに横這いないし微増傾向にあるのがわかる。ここ数年来、人口、世帯の大きな変動は見られない。また、農家戸数、農家人口についても、10年間では大きな変化はないが、戸数、人口ともに微減傾向にある。とくに、専業農家は、10年間で14戸減り、かわって、第一種兼業農家が（5戸）増えている。

表1 南七区・東七区の人口、農家戸数、農家人口の推移 [南七区・東七区：1985-95年]
(単位：人、戸)

	南七区・東七区の世帯数、人口の推移								玉野市七区(南七区・東七区の総計)の農家戸数、農家人口の推移											
	南七区				東七区				農家戸数				男				女			
	世帯数	総人数	男	女	世帯数	総人数	男	女	総農家	専業	一兼	二兼	総人数	14以下	15-64	65以上	総人数	14以下	15-64	65以上
1985年	66	277	128	149	56	231	123	108	102	40	36	26	216	34	157	25	225	38	161	26
1990年	75	294	140	154	58	242	126	116	97	37	36	24	211	34	154	23	214	34	152	28
1995年	81	288	139	149	59	252	134	118	95	26	41	28	207	31	138	38	205	31	139	35

注1：「世帯数、人口の推移」については『国勢調査』。また「農家戸数、農家人口の推移」については『農業センサス』の各年次のデータをもとに作成。
 注2：表中の「専業」、「一兼」、「二兼」は、「専業農家」、「第一種兼業農家」、「第二種兼業農家」を示す。また、「14以下」、「15-64」、「65以上」は、それぞれ「14歳以下」の年少人口、「15-64歳」の生産年齢人口、「65歳以上」の老年人口を示す。

加えて、15歳から64歳の「生産年齢人口」が、この5年間(1990-95)で激減している。そのぶん、65歳以上の「老齢人口」の増加が見られるわけだが、これは、入植第一世代の多くが90年代に入って65歳をこえたために生じた変化であるといえる。1960年前後に移住してきた入植第一世代の大半が65歳以上となりつつある現在では、「生産年齢人口」の多くは入植第二世代(子世代)が占めるようになってきた。実際の農業労働は、依然として、入植第一世代がその基幹を担っているが、27.4%(1995)と高い専業農家率(玉野市全体では17.2%)を示しているこの地域では、第二世代の農業従事者(農業後継者)も一定程度育っているものと思われる。

2-3. 散居型集落(「南七区」)と密居型集落(「東七区」)

図1の干拓地エリアに点在する「■」印は居住建物をあらわすものであるが、「南七区」では、それが、道路に沿って広い間隔(およそ60m間隔)で散在している。一方、「東七区」では、「南七区」に隣接する幹線道路沿いと浄化センター横の道路沿いとに集積しながら、並んでいるのがわかる。つまり、「南七区」と「東七区」とでは、居住形態において違いが見られるわけである。

児島湾干拓地の場合、たとえば灘崎町西高崎、玉野市東高崎(「第一区」)や岡山市藤田地区(「第二区」「第六区」)など1960年以前に竣工した干拓地では、原則として「疎居方式」が採用され、個々の家屋、ならびに耕地は等間隔に配置されている。「第七区」干拓地でも、1951(昭和26)年に入植が始まった「西七区」と1960(昭和35)年に入植が始まった「南七区」では、「疎居方式」がとられ、集落は「散居型」となっている。ところが、1963(昭和38)年に入植開始の「後発」干拓地である「北七区」と「東七区」では、居住集落は、数カ所に集められ、耕地と居住地は別々に配分されている。つまり、集落は「密居型」となっているわけである。そして、これら両タイプの集落構成をモデル化したものが図2a、図2bである。

図2aの「散居型」集落は、隣家との間に距離があり、耕地兼居住地となっている各個の所有地が等間隔に並んでいる。それが時として、「お隣付き合い」や「近所付き合い」のしづら

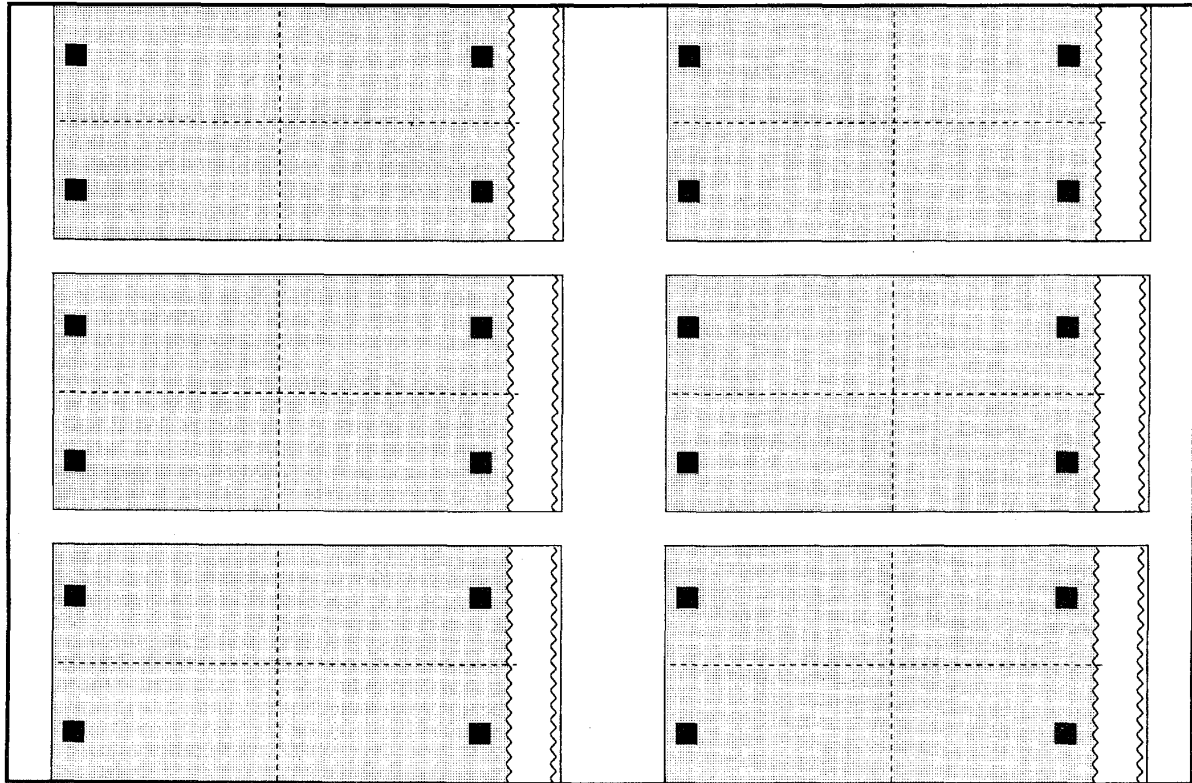


図 2a 散居型集落の構成

注：「■」は居住建物、薄い囲み部分は耕地、波線内は水路を表す。なお、点線内部分は個人の所有地域を表す。

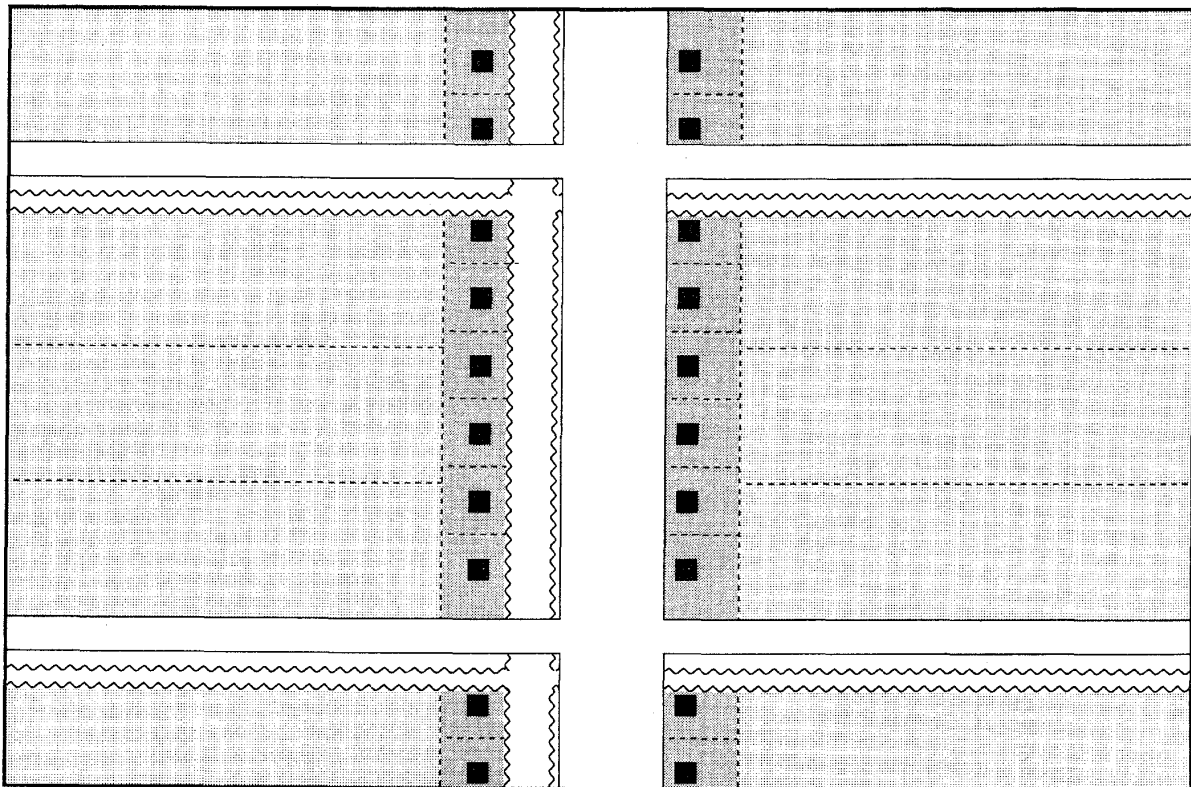


図 2b 密居型集落の構成

注：「■」は居住建物、薄い囲み部分は耕地、濃い囲み部分は居住区域、波線内部分は水路を表す。

さにつながる反面、田畑が居住地に隣接しているため（受託耕地は別として）、田畑への往復や農作業がしやすいという利点を生んでいる。図2bの「密居型」集落は、その反対に、居住地のみが幹線道路沿いに配列されている。このため、近隣とのつきあいは「密」となる傾向があるが、居住地と耕地とが必ずしも隣接しているわけではないために、田畑が家から遠いという特徴が見られる。

秋田県大潟村では、その大多数が「密居型」集落を形成しているが、松岡昌則によれば、「密集した家々の配置のために、相互の監視が意識され、緩やかな接触ができにくくなっている」⁶⁾ ケースも見られるという。児島湾干拓地では1960年頃を境に居住集落が「散居型」→「密居型」へとかわっていったが、大潟村の第一次入植は1967（昭和42）年であり、その頃には、居住区と圃場とを分離した「密居型」集落が国内干拓地農村でも一般化していたのである。（大潟村の場合は、さらに居住区が住宅地と公共施設帯とに分かれ、居住区と圃場の境には格納庫地帯（農業施設区）がある）こうした「密居型」集落の創設は、居住地を中央部に集めることで生活における交流を深められるようにという意図にもとづいているわけだが、実際には「相互の監視を意識する」という大潟村のようなケースも見られるのである。「密居型」集落を形成している「東七区」の住民がどのような近隣関係を築き、またいかなる地域観を有しているのか、「散居型」集落構成である「南七区」との比較を通じて、以下に詳述してみたい。

2-4. 調査の方法 - 「南七区」と「東七区」との比較調査

散居型集落を形成する「南七区」と密居型集落を形成する「東七区」とでは、住民の家族、近隣関係や生活意識にいかなる違いが見られるのか。本調査は、このような干拓地における集落編成の違いが、入植者の生活や意識にどのような影響を与えているのかを把握するために、1999（平成11）年8月、岡山県玉野市南七区、同東七区を対象地として実施したものである。両地区は、ともに昭和30年代の入植者が住民の大多数を占める干拓地農村であり、今日（1995年時点）でも約7割が販売農家として農業経営に参画している。集落構成、そして一戸当たりの世帯員数（つまりは家族構成）の違いをのぞけば、両地区は、ほぼ同質的な農村地帯であるといえるだろう。

調査対象者は、南七区、東七区両地区内に居住する65歳以上の高齢者のうち、回答が困難であると思われる80歳をこえる者（11名）をのぞいた全員である。つまり、両地区内の65歳以上の全高齢者を対象とした悉皆調査である。対象者は、1999年6月1日時点での選挙人名簿より抽出し、総数106（南七区56、東七区50）であった。調査は、郵送法によるもので、質問項目、ならびに単純集計結果については「単純集計表」として、本稿末に示したとおりである。

回答数は合計86（南七区40、東七区46）で、回答率は81.1%であった。なお、回答者の性別・年齢層は表2のようにになっている。男女比および年齢差に8%程度の差は見られるが、どちらについても大きな差とはなっていない。

こうして実施した調査であるが、この調査は、対象者を高齢者に限定したものであり、地区内の「全住民」を対象としたものではない。つまりは、干拓地農村の「高齢者調査」といえるわけである。しかし、現在65歳以上となっている調査回答者は、農村高齢者であるということに加え、この干拓地への入植第一世代の者が多いという特徴が見られる。全戸の約9割が、

表2 回答者の性別・年齢層

(単位：％(人))

	性別		年齢区分			計
	男	女	69歳以下	70-74歳	75歳以上	
南七区	57.5 (23)	42.5 (17)	50.0 (20)	37.5 (15)	12.5 (5)	100.0 (40)
東七区	50.0 (23)	50.0 (23)	41.3 (19)	39.1 (18)	19.6 (9)	100.0 (46)
計	53.5 (46)	46.5 (40)	45.3 (39)	38.4 (33)	16.3 (14)	100.0 (86)

昭和30年代の入植農家によって占められている南七区と東七区では、その当初の入植者の大多数が、1990年代後半になって65歳をこえるにいたっている。

こうした点を鑑みれば、この地域で実施する「高齢者調査」とは、同時に入植第一世代の者を対象とした「入植者調査」という側面をも有しているのである。すなわち本調査は、このような南七区と東七区における「入植当初からの住民」の生活や意識をあらためて把握しようとするものであるといえるわけである。それは、かれら「入植第一世代」が、「第二世代」やその後の転入者に比べて、相応の目的意識を持って入植し、干拓地で農業を営み、そして干拓地居住歴も長く、まさに「干拓地住民」と呼ぶにふさわしい存在であるからにはほかならない。かれら「干拓地住民」の意識や行動に、居住集落の違いが、いかなる影響を与えているのか。次には、南七区、東七区両地区の回答者の回答を比較しながら調査データを分析していきたい。

3. 干拓地農村における高齢者の家族と地域生活 — 散居型集落と密居型集落の住民特性

まず、回答者を居住地区によって南七区、東七区に分け、回答者の移住・入植時期をそれぞれについて見てみたい。「現在の居住地に住み始めた時期」を地区別に示した表3によると、昭和35年の入植者が多い南七区では、全体の87.2%がこの頃(昭和32-37年)に住み始めたことがわかる。また、昭和38年の入植者が住民の多くを占めている東七区でも、入植の開始された時期(昭和38-44年)に住み始めた者が93.4%と大多数を占めている。入植開始時期から30年以上を経た今日においても、両地区の高齢者住民の9割程度は、入植当初からの住民、つまりは「入植第一世代」によって占められている。加えて、その入植時期についても双方の地区ともに昭和30年代とほぼ同時期である。南七区、東七区の両地区の高齢者は、その多数が昭和30年代の「入植第一世代」であるといえるわけである。

では、これら回答者はどこから移住してきたのか。「回答者の先住地」を地区別に示した表4によれば、南七区の住民は岡山市(42.5%)、倉敷市(12.5%)、灘崎町(12.5%)など、周辺市町からの移住者が全体のおよそ2/3を占めるが、東七区では同じ岡山県内でも、近隣市町以外からの、つまりは比較的遠方からの移住者が63.0%を占める。南七区が近隣市町からの入植者の割合の多い地区であるのに対して、東七区は岡山県内各地からの入植者の比率が高い地区であるといえる。

このように、南七区と東七区は、高齢者住民の多数が「入植第一世代」であるという点では共通するが、かれらの先住地に着目すると、南七区に「近距離」移住者が多いのに対して、東

七区には「遠・中距離」移住者が多いという違いが見られる。

3-1. 家族構成と近隣関係

以上のような属性をもって示される高齢者住民であるが、かれらはどのような家族を構成しているのか。ここで同居家族のタイプを地区別に見ておきたい。表5によると、南七区では「夫婦のみの家族」が51.4%と最も多く、以下、「拡大家族」(25.7%)、「父子・母子家族」(11.4%)と続く。他方、東七区では「拡大家族」が53.3%と過半数を占め、以下、「夫婦のみの家族」(20.0%)、「父子・母子家族」(15.6%)と続く。南七区では「拡大家族」(三世大家族)がおおよそ1/4となっているが、これは「拡大家族」の比率がおおよそ5割を占める近

表3 現在の居住地に住み始めた時期 (単位：%(人))

	現在の居住地に住み始めた時期						計
	S. 31 以前	S. 32-37	S. 38-44	S. 45-54	S. 55-63	H. 1 以降	
南七区	0.0 (0)	87.2 (34)	7.7 (3)	0.0 (0)	5.1 (2)	0.0 (0)	100.0 (39)
東七区	0.0 (0)	0.0 (0)	93.4 (43)	2.2 (1)	2.2 (1)	2.2 (1)	100.0 (46)

注：表中の「網掛け」は、地区間の比較で10ポイント以上高い値(%)を示す数値に付している。

表4 回答者の先住地 (単位：%(人))

	岡 山 県 内					その他の地域	計
	周 辺 地 域						
	玉野市	灘崎町	倉敷市	岡山市			
南七区	7.5 (3)	12.5 (5)	12.5 (5)	42.5 (17)	22.5 (9)	2.5 (1)	100.0 (40)
東七区	8.7 (4)	0.0 (0)	0.0 (0)	19.6 (9)	63.0 (29)	8.7 (4)	100.0 (46)

注：表中の「網掛け」は、地区間の比較で10ポイント以上高い値(%)を示す数値に付している。

表5 同居家族のタイプ (単位：%(人))

	独 居	夫婦のみの家族	核家族	父子・母子家族	拡大家族	その他	計
南七区	2.9 (1)	51.4 (18)	8.6 (3)	11.4 (4)	25.7 (9)	0.0 (0)	100.0 (35)
東七区	0.0 (0)	20.0 (9)	6.7 (3)	15.6 (7)	53.3 (24)	4.4 (2)	100.0 (45)
計	1.3 (1)	33.7 (27)	7.5 (6)	13.8 (11)	41.2 (33)	2.5 (2)	100.0 (80)

注1：表中の「網掛け」は、地区間の比較で10ポイント以上高い値(%)を示す数値に付している。

注2：合計値に「N. A.」の数は含まれていない。

隣の地区（東七区をはじめ、以前、われわれが調査を実施した灘崎町西高崎、同北七区でも拡大家族は約5割の比率を示している）に比べて、少ないといえる。このことは、南七区の「一戸当たりの世帯員数」の少なさにもあらわれており、それは1995年の国勢調査のデータで、東七区が4.27人であるのに対し、南七区は3.56人となっていることからわかる。南七区は、三世代家族の比率が周辺地区に比べて低いが、そのぶん、高齢者夫婦のみの家族の割合が高い。それが一戸当たりの世帯員数の少なさにもつながっているのである。

東七区に比して、南七区でとくに「夫婦のみの家族」が多いのは、南七区に、子夫婦が同敷地内の別棟にすむいわゆる「別棟同居型」の家族や子のいない高齢者夫婦が多いという理由によるものではない。それは、南七区の高齢者、つまりは入植第一世代の子（夫婦）にあたる第二世代のおよそ半数が他出し、地区外に居住しているからであると考えられる。

もちろん、これらを家族周期や世代交代の過程で発生する過渡的な状態と見ることもできるわけだが、南七区と東七区の入植時期がほぼ同じであるという点をふまえれば、南七区では、入植第二（子）世代が後継者として農業を基幹的に営むケースが少なく、そのことが親との同居率の低さにつながっていると思われるのである。南七区における高齢者と子夫婦との同居率の低さは、南七区の地理的要件に加え^⑦、子夫婦の離農・兼業志向のあらわれと理解することができる。

そして、このような両地区間での「同居家族のタイプ」の違いが、高齢者の望む「将来の暮らし方」においても、違いを生み出すに至っている。表6は、希望する「将来の暮らし方」を地区別に示したものであるが、この表によると、「拡大家族」（三世代家族）の多い東七区では、「同居型」が66.7%と全体の2/3を占めている。「夫婦のみの家族」が過半数を占める南七区では、同じように「同居型」が44.2%と多いが、その値は、東七区より22.5ポイントも低い。東七区との比較という点では、むしろ「自立型」（17.6%）や「施設入居型」（11.8%）の割合の大きさが目立っている。高齢夫婦家族が多い南七区の高齢者住民は、将来においても、「だれの世話にもならない」あるいは「老人ホームなどの施設で暮らしたい」など、直接的には子どもの世話にはなりたくないという者が少なからず存在しているのである。

三世代同居の高齢者は、そのまま将来も子との同居を望む傾向が見られ、こうした家族は、

表6 将来の暮らし方

(単位：% (人))

	自立型	同居型	施設入居型	近居型	その他	計
南七区	17.6 (6)	44.2 (15)	11.8 (4)	23.5 (8)	2.9 (1)	100.0 (34)
東七区	4.8 (2)	66.7 (28)	2.4 (1)	19.0 (8)	7.1 (3)	100.0 (42)
計	10.5 (8)	56.5 (43)	6.6 (5)	21.1 (16)	5.3 (4)	100.0 (76)

注1：「濃い網掛け」は、地区間の比較で10ポイント以上高い値（%）を示す数値に付し、「薄い網掛け」は、7ポイント以上高い値（%）を示す数値に付している。

注2：自立型は「だれの世話にもならないで自立して暮らしたい」、同居型は「子供たちと一緒に暮らしたい」、施設入居型は「老人ホームなどの施設で暮らしたい」、近居型は「子供たち夫婦と顔をあわせられる距離に住んで暮らしたい」という設問にそれぞれ対応している。

注3：合計値に「N. A.」の数は含まれていない。

とくに東七区に多い。他方、夫婦のみで暮らしている高齢者は、「自立」や「施設入居」など子どもに頼らない将来の暮らし方を考える者もあり、こうした高齢者は南七区のほうに多く見られるのである。

このように、「同居家族のタイプ」ならびに「将来の暮らし方」については、南七区と東七区とでは大きな差が見られた。この差は、農家経営上の違いや地理的要件の違いなどによって生じたものと推測されるが、この差を、先の両地区の「集落編成の違い」によるものであると断定することは難しい。むしろ集落編成の違いから生じる両地区間の差は、以下に示すような高齢者の「茶飲み友だちの居住地」などに特徴的にあらわれているといえる。

表7を見ると、東七区では、「茶飲み友だちの居住地」として、「2~3軒となり」をあげる者が20.0%ほどいる。この数値は南七区よりも14.4ポイントも高い。密居型集落を形成している東七区では、集落が1ヶ所に集積しており、隣家との距離が近い。その結果、「2~3軒となりの者とのつきあい」もいわば「隣近所のつきあい」の範疇に含まれ、交友関係を維持することができる。しかし、それが隣家との距離が数十mある散居型の集落形式をとる南七区では、同じ「2~3軒となり」であってもその距離は長く、場合によっては「隣近所」とはよべない距離ともなってしまう。高齢者の茶飲み友だちの居住地を見るかぎりでは、集落編成の差が、とくに「2~3軒となり」の者とのつきあいの差として現出しているのである。

また、集落編成の差は、高齢者の「同居家族以外で頼りになるもの」にもあらわれている。「同居家族以外で頼りになるもの」を地区別に示した表8によれば、密居型集落編成の東七区

表7 茶飲み友だちの居住地

(単位: % (人))

	となり	2~3軒となり	徒歩で行ける距離	車やバスで行く距離	他地区	とくにいない	計
南七区	11.1 (4)	5.6 (2)	38.9 (14)	13.9 (5)	11.1 (4)	19.4 (7)	100.0 (36)
東七区	5.0 (2)	20.0 (8)	32.5 (13)	12.5 (5)	2.5 (1)	27.5 (11)	100.0 (40)
計	7.9 (6)	13.2 (10)	35.4 (27)	13.2 (10)	6.6 (5)	23.7 (18)	100.0 (76)

注1: 「濃い網掛け」は、地区間の比較で10ポイント以上高い値(%)を示す数値に付し、「薄い網掛け」は、7ポイント以上高い値(%)を示す数値に付している。

注2: 合計値に「N. A.」の数含まれていない。

表8 同居家族以外で頼りになるもの

(単位: % (人))

	本家・分家	妻や嫁の実家	親類	隣人	近所の人	友人	他出の子	その他	計
南七区	27.5 (11)	27.5 (11)	50.0 (20)	27.5 (11)	32.5 (13)	17.5 (7)	35.0 (14)	22.5 (9)	100.0 (40)
東七区	15.2 (7)	17.4 (8)	56.5 (26)	21.7 (10)	50.0 (23)	21.7 (10)	34.8 (16)	34.8 (16)	100.0 (46)
計	20.9 (18)	22.1 (19)	53.5 (46)	24.4 (21)	41.9 (36)	19.8 (17)	34.9 (30)	29.1 (25)	100.0 (86)

注: 表中の「網掛け」は、地区間の比較で10ポイント以上高い値(%)を示す数値に付している。

では、「近所の人」をあげる者が50.0%と半数を占める。それは、散居型の南七区に比べれば17.5ポイントも高い。南七区では、「本家・分家」(27.5%)、「妻や嫁の実家」(27.5%)をあげる者の比率が東七区に比べて高いが、そのぶん「近所の人」をあげる者が少なくなっている。「近所の人」を頼ろうとする姿勢は、やはり隣家との距離が近い東七区の住民に多く見られるのである。⁽⁸⁾

こうして、「茶飲み友だちの居住地」や「同居家族以外で頼りになるもの」についての回答結果から、密居型集落である東七区の近隣関係の強さがうかがえるわけである。⁽⁹⁾

3-2. 地域社会とのかかわりと高齢者の地域観

次いで、高齢者の地域行事への参加頻度を「(小学校区または七区干拓地での)祭りや盆踊りへの参加」を例にとって見てみたい。表9に示すように、東七区のほうが「世話したことがある」という者、つまり「積極的な」参加者の割合が10.9ポイント高く、同じように、「よく見に行く」という「消極的な」参加者の割合も10.7ポイント高い。南七区のほうで「行ったことがない」、つまり非参加者が多い(10.0%)のを見れば、祭りや盆踊りへの参加は、東七区のほうでより積極的であるということができる。散居型集落(南七区)に比べて、密居型集落(東七区)では、集落内の住民間での連帯感・一体感がつよく、それが高齢者住民のこうした地域行事への「積極的な」参加態度を形成しているものと思われる。

表9 地域の祭りや盆踊りへの参加 (単位：％(人))

	世話したことがある	よく参加する	たまに参加する	よく見に行く	行ったことがない	計
南七区	50.0 (20)	12.5 (5)	30.0 (12)	35.0 (14)	10.0 (4)	100.0 (40)
東七区	60.9 (28)	8.7 (4)	34.8 (16)	45.7 (21)	2.2 (1)	100.0 (46)
計	55.8 (48)	10.5 (9)	32.6 (28)	40.7 (35)	5.8 (5)	100.0 (86)

注：「濃い網掛け」は、地区間の比較で10ポイント以上高い値(%)を示す数値に付し、「薄い網掛け」は、7ポイント以上高い値(%)を示す数値に付している。

表10 地域運営のあり方 (単位：％(人))

	和を大切にする	できるだけ意見を出しあう	どちらともいえない	計
南七区	51.4 (19)	29.7 (11)	18.9 (7)	100.0 (37)
東七区	60.5 (26)	30.2 (13)	9.3 (4)	100.0 (43)
計	56.2 (45)	30.0 (24)	13.8 (11)	100.0 (80)

注1：表中の「網掛け」は、地区間の比較で7ポイント以上高い値(%)を示す数値に付している。

注2：合計値に「N. A.」の数は含まれていない。

このような密居型集落（東七区）の住民の連帯感や一体感、すなわち集落としての凝集性ないし結束力のつよさは、「地域社会の運営のあり方」にもあらわれている。表10は、「地域社会の運営」にあたって「和を大切にするか」あるいは「できるだけ意見を出し合うか」を問うた結果を示したものである。両地区ともに「和を大切にする」とした者が半数をこえ、この点では、両地区ともに「和を重視する」農村社会の特徴、性格を体現したものであるといえる。しかし地区別に見ると、「和を大切にする」の割合は、東七区のほうが9.1ポイント高い。この差については、密居型集落（東七区）における住民間の凝集性のつよさのあらわれと考えられる。

また、高齢者住民の地域社会へのモラルを地区別に示したのが、表11（人間関係の良好度）、表12（地域への愛着度）、表13（「よそ者」度）、表14（定住志向）である。表12、表13、表14を見ると、「愛着を感じる」「よそ者とは思わない」「住み続けたいと思う」の数値はどれも70～80%に達しており、両地区の住民ともに、地域への帰属意識は高く、定住志向も強いことがわかる。さらに、「他の干拓地と比べて人間関係は良好だと思うか」の問いに対する回答結果を示した表11を見ても、数値こそ50～60%程度にとどまってはいるが、「思う」の数値が両地区ともに過半数に達している。これらの結果を見るにおいては、高齢者住民の地域社会へのモラルは高いといつてよいだろう。ただし、これらの結果を地区別に見てみると、東七区のほうが（南七区に比べて）、地域社会へのモラルが高いということがわかる。「人間関係が良好であると思う」「愛着を感じる」「よそ者」とは思わない」「住み続けたいと思う」とする者の割合が、東七区のうほうで10ポイント程度高い値を示しているのである。

ここが干拓地である以上、住民は、必然的に他所からの入植者・移住者で占められるわけだが、入植第一世代の入植以来30年以上を経た現在では、高齢者住民の当該干拓地へのモラルは相当に高いものとなっている。しかし、そのモラルが、たとえば集落内の人間関係や近隣との関係などによって規定されるものであるとすれば、（散居型と密居型といった）集落編成の違いは、住民のモラル形成のあり方に少なからず影響を与えることになるはずである。したがって、東七区のほうで帰属意識や定住志向が高いというのも、一つには、こうした集落編成、つまりは密居型集落における住民間の凝集性高さ、さらには結合度のつよさが影響しているものと思われる。

表11 人間関係は良好か

(単位：％(人))

	思う	思わない	どちらともいえない	計
南七区	51.4 (19)	10.8 (4)	37.8 (14)	100.0 (37)
東七区	60.0 (27)	13.3 (6)	26.7 (12)	100.0 (45)
計	55.8 (46)	10.5 (10)	32.6 (26)	100.0 (82)

注1：「濃い網掛け」は、地区間の比較で10ポイント以上高い値(%)を示す数値に付し、「薄い網掛け」は、7ポイント以上高い値(%)を示す数値に付している。

注2：合計値に「N. A.」の数は含まれていない。

表 12 地域への愛着を感じるか (単位：％ (人))

	感じる	感じない	どちらともいえない	計
南七区	74.3 (29)	2.6 (1)	23.1 (9)	100.0 (39)
東七区	82.3 (37)	4.4 (2)	13.3 (6)	100.0 (45)
計	78.5 (66)	3.6 (3)	17.9 (15)	100.0 (84)

注1：「網掛け」は、地区間の比較で7ポイント以上高い値(%)を示す数値に付している。

注2：合計値に「N. A.」の数は含まれていない。

表 13 この土地では「よそ者」か (単位：％ (人))

	思う	思わない	どちらともいえない	計
南七区	7.7 (3)	74.4 (29)	17.9 (7)	100.0 (39)
東七区	9.1 (4)	84.1 (37)	6.8 (3)	100.0 (44)
計	8.4 (7)	79.6 (66)	12.0 (10)	100.0 (83)

注1：「濃い網掛け」は、地区間の比較で10ポイント以上高い値(%)を示す数値に付し、「薄い網掛け」は、7ポイント以上高い値(%)を示す数値に付している。

注2：合計値に「N. A.」の数は含まれていない。

表 14 この地域に住み続けたいか (単位：％ (人))

	思う	思わない	どちらともいえない	計
南七区	74.4 (29)	5.1 (2)	20.5 (8)	100.0 (39)
東七区	86.3 (38)	2.3 (1)	11.4 (5)	100.0 (44)
計	80.7 (67)	3.6 (3)	15.7 (13)	100.0 (83)

注1：「濃い網掛け」は、地区間の比較で10ポイント以上高い値(%)を示す数値に付し、「薄い網掛け」は、7ポイント以上高い値(%)を示す数値に付している。

注2：合計値に「N. A.」の数は含まれていない。

4. 小括

南七区と東七区は、高齢者比率をはじめ、高齢者の年齢構成や男女比、さらには農業生産への参画状況や入植年代など、その多くを見るかぎり、兎島湾干拓地の中でもおおよそ同質的な干拓エリアであるといえる。こうしたなかで、両地区間においてあえて異なる点をあげるとすれば、それは、①集落形式、②高齢者の家族構成、③地理的要件、の3点である。①の集落形式については、南七区が「散居型」で東七区が「密居型」であるという点である。②の高齢者の家族構成は、南七区では半数が「高齢者のみの夫婦」であるのに対し、東七区では「三世代家族」が主となっている点である。もちろん、これらの違いは、あくまで「傾向としての差」であり、また、場合によっては家族周期上の「過渡的な違い」によるものともとれるため、この「違い」の検証にはさらなる慎重さと正確さが要求される。また、③の地理的要件については、JRの駅や国道に近接し交通の便がよい南七区に対して、東七区は地区内に私立高校を有するがエリア全体としては兎島湾に接する「純干拓地農村」であるということである。ただし、この地理的要件の違いはさほど大きなものとは思われず、むしろ、同じ玉野市に包含される干拓農村エリアであるという点では、地理的・地形的にも近似していると考えたほうがよいといえるだろう。

したがって、南七区と東七区で、現在、明らかな違いとして確認できるのは、①の集落形式のみである。そして、この集落形式の違いが、高齢者住民の生活特性の差としてあらわれている。

まず、「茶飲み友だち」や「頼りになる人たち」とのかかわりから、高齢者の交友・親交関係、とくに近隣との関係のあり方に着目してみると、南七区と東七区とでは、「となり」同士の関係性よりも、むしろ「2～3軒となり」や「近所」との関係性において有意な差が見られた。確かに、密居型集落を形成する東七区では隣家との距離が近く、そこでは「2～3軒となり＝近所」という概念が成り立ちうる。しかし、散居型集落編成の南七区では「2～3軒となり」となるとその距離は数十mにおよぶ。それは時として「近所」の範疇に入らない場合も考えられる。東七区の高齢者が、南七区の高齢者に比べて近所との関係が「密」とであるというのも、入植以来の集落の構成、とりわけ「隣家との距離」や「家々の間隔」の差によるところが大きいといえるのである。

また、地域行事への参加や地域運営のあり方、そして地域社会へのモラルの高低などを見てみると、東七区の高齢者住民のほうがより地域社会への関与、愛着が大きいことが明らかとなった。現在の高齢者がその多数を占める「入植第一世代」は、いうまでもなく、入植当初より地区内住民同士で協力して地域社会の形成に努めてきたわけだが、その過程で発生する労苦や困難は、南七区、東七区両地区の住民がともに経験してきたものである。また入植年代もほぼ同時期であることを鑑みれば、こうした両地区間の地域への関与度および愛着度の差は、その多くの面で集落編成の違いに起因するものであると考えるのが妥当であろうと思われる。

自身で土地を購入し、そして移住後は一貫してそこで農業を営んできた入植者が多いという点で、この地域では、住民の地域社会へのモラルは他の平地農村以上に高いものと思われるが、それがより東七区で高くなるのは、密居型の集落編成によって、近隣住民相互の生活面での交流頻度が増し、それが結果として、地域社会へのかかわりの大きさ、そして郷土愛の醸成へと結びついているからである。

こうして、干拓地農村の高齢者住民は、集落編成の違いによって、その意識や行動のあり方を異なるものとしている。⁽¹⁰⁾ これらをより精緻に把握するためには、おそらく個別の事例調査が必要となるだろうが、少なくとも、以上のような統計調査のデータを見るかぎりにおいては、それは近隣関係や地域観（さらにいえば家族形態）の差としてクリアにあらわれることとなった。ここから、同じ干拓地農村でありながらも、散居型、密居型といった集落形式の違いによって、その干拓地、ならびに干拓地の住民の有する諸々の「性格」は、多少ならずとも異なったものとなりうるということが明らかにされたわけである。

注

- (1) 灘崎町『灘崎町農業発達史』、1990年、559頁。
- (2) 灘崎町、前掲書、1990年、561頁。
- (3) 第七区干拓地における「集落」とは、西七区、南七区、北七区、東七区という4つの入植期以来の居住による「まとまり」をさしているものである。したがって、ここでは、とりあえず、集落を、居住区画と入植年代とによって区分される家々の「まとまり」と位置づけておきたい。
- (4) 玉野市『玉野市の概要』、1998年、1頁。
- (5) 玉野市、前掲書、1998年、10-12頁。
- (6) 松岡昌則『現代農村の生活互助-生活協同と地域社会関係-』御茶の水書房、1991年、283頁。
- (7) 南七区は、国道30号線が周辺を通り、JR宇野線の八浜駅が近接するなど、交通の便がよい。(図1参照)
- (8) ちなみに、実際に行っている「隣近所のつきあい」の内容についても、両地区間では差（必ずしも明確な差とはなっていないが）が見られる。南七区では、「ケガや病気の時の介護」(12.5%)や「困ったときの相談」(30.0%)など「非常時・緊急時のつきあい」をする者の割合が、東七区に比べて高くなっている。東七区では、「日常茶飯事までお互いにつきあう」(15.2%)、「とくにつきあいはない」(15.2%)という回答が、南七区より多い。このデータのみからはにわかに判断しかねるが、東七区では、つきあいを「密」にする者と、つきあいのない者とが混在しているとも考えられる。(「単純集計表」設問11参照)
- (9) ここでいう東七区の「近隣関係の強さ」とは、あくまで南七区との比較による「相対的」なものである。「近所付き合い」そのものについては、どちらの地区でも「あいさつや世間話をする程度」を希望する者が6割程度に達しており、他の干拓地農村同様「密」な近所付き合いを望む高齢者は少ない。(「単純集計表」設問12参照)つまり、近隣関係そのものが、決して他の平地農村地域より強いというわけではないのである。むしろ、結果だけ見れば、(もちろん単純な比較は禁物だが)近接する灘崎町内の干拓エリアである北七区、西高崎、片岡の各地区よりも「弱い」ともいえるのである。(石阪督規「干拓地農村における家族と農民意識-岡山県児島郡灘崎町の事例-」広島大学大学院社会科学研究所『社会文化論集』第5号、1998年、231-270頁、参照のこと)
- (10) もちろん、農村の集落構成を、家々の「距離」などの「物理的な」要素のみをもって特徴づけようとするのは難しいわけだが、干拓地農村の特殊事情(人工村、入植農村、土地の均等配分など)を鑑みた場合、本稿で検討してきた(集落編成上の)「隣家との距離の違い」のもつ意味は、無視できるものではない。

〔資料〕単純集計表〔玉野市南七区・東七区高齢者調査：1999年8月実施〕

I. フェイス・シート

FS-1 性別

	南七区	東七区
1 男	57.5	50.0
2 女	42.5	50.0
	(40)	(46)

FS-2 年齢

	南七区	東七区
1 65～69歳	50.0	41.3
2 70～74歳	37.5	39.1
3 75～80歳	12.5	19.6
	(40)	(46)

II. 先住地のことについておうかがいします。

問1 現在の居住地にはいつから住んでいますか。

	南七区	東七区
1 昭和31（1956）年以前	0.0	0.0
2 昭和32（1957）年～昭和37（1962）年	85.0	0.0
3 昭和38（1963）年～昭和44（1969）年	7.5	93.4
4 昭和45（1970）年～昭和54（1979）年	0.0	2.2
5 昭和55（1980）年～昭和63（1988）年	5.0	2.2
6 平成元（1989）年以降	0.0	2.2
7 N. A.	2.5	0.0
	(40)	(46)

問2 現在の居住地に来る前はどこに住んでいましたか。（現在の行政区分による）

	南七区	東七区
1 玉野市	7.5	8.7
2 灘崎町	12.5	0.0
3 岡山市	42.5	19.6
4 倉敷市	12.5	0.0
5 岡山県内のその他の地域	22.5	63.0
6 中国地方で岡山県以外の地域	0.0	0.0
7 近畿地方	0.0	0.0
8 九州地方	0.0	0.0
9 その他	2.5	8.7
	(40)	(46)

問3 あなたの先住地での主な職業は何でしたか。

	南七区	東七区
1 農業	80.0	82.7
2 林業・漁業	2.5	2.2
3 農林漁業以外の自営	2.5	4.3
4 常勤の勤め人	2.5	4.3
5 臨時の勤め人（パート・日雇いを含む）	2.5	2.2
6 主婦	7.5	4.3
7 軍人	2.5	0.0
8 学生	0.0	0.0
9 その他	0.0	0.0
	(40)	(46)

問4 先住地に訪れる（帰郷・訪問）ことがありますか。

	南七区	東七区
1 年1回以上訪れる	82.5	80.1
2 2～3年に一度くらい訪れる	12.5	13.3
3 5～10年ほど訪れていない	0.0	0.0
4 10年以上訪れていない	2.5	2.2
5 現住地に住んで一度も訪れていない	2.5	0.0
6 帰郷・訪問するところはまだ存在しない	0.0	4.4
7 N. A.	0.0	0.0
	(40)	(46)

問5 前の問4で「1～4」を選んだ方のみお答えください。先住地を訪れる目的・理由は何ですか。あてはまるものをいくつでも選んでください。

	南七区	東七区
1 盆・正月のあいさつ	57.5	60.9
2 お中元・お歳暮等の持参	35.0	26.1
3 冠婚葬祭	50.0	56.5
4 忙しいときの手伝い	7.5	6.5
5 ケガや病気の時の介護	12.5	15.2
6 とくに理由はない	20.0	10.9
7 その他	15.0	19.6
	(40)	(46)
累計	(80)	(90)

Ⅲ. あなたの生活についておうかがいします。

問6 あなたは現在、農作業を行っていますか。

	南七区	東七区
1 年間を通じて、農作業に基幹的にたずさわっている	45.0	52.2
2 年間を通じて、農作業を補助的に手伝っている	17.5	19.6
3 農繁期のみ農作業を手伝っている	5.0	0.0
4 自家菜園を耕している程度	15.0	13.0
5 現在、農作業を行っていない	7.5	13.0
6 N. A.	10.0	2.2
	(40)	(46)

問7 あなたは次にあげる集団やグループに参加していますか。現在加入しているものすべてに○をつけてください。

	南七区	東七区
1 農協	52.5	39.1
2 婦人会・農協婦人部	17.5	15.2
3 老人会・老人クラブ	62.5	67.4
4 氏子会・寺の檀家・講など	17.5	26.1
5 同窓会・同郷会・県人会など	32.5	34.8
6 趣味の会・スポーツ団体・レジャークラブ	27.5	21.7
7 宗教団体	7.5	0.0
8 社会福祉協議会・社会福祉団体	0.0	2.2
9 消費者団体・生協	2.5	0.0
10 政党・政治家後援会	15.0	13.0
11 その他	5.0	2.2
12 何も参加していない	5.0	13.0
	(40)	(46)
累計	(98)	(108)

問8 あなたの同居家族のタイプはどれにあてはまりますか。

	南七区	東七区
1 自分一人で住んでいる	2.5	0.0
2 夫婦で住んでいる（夫婦のみの家族）	45.0	19.6
3 夫婦と未婚の子どもだけで住んでいる（核家族）	7.5	6.5
4 父子または母子で住んでいる（父子・母子家族）	10.0	15.2
5 三世代以上一緒に住んでいる（拡大家族）	22.5	52.2
6 その他	0.0	4.3
7 N. A.	12.5	2.2
	(40)	(46)

問9 あなたは、この土地で住み続けていくうえで、家族以外で頼りになる人や家、機関はありますか。最も頼りになるものを3つまであげてください。

	南七区	東七区
1 本家や分家	27.5	15.2
2 妻や嫁、つれあいの実家	27.5	17.4
3 近くの親類	47.5	43.5
4 遠方の親類	2.5	13.0
5 隣りの人	27.5	21.7
6 近所の人	32.5	50.0
7 役場	0.0	6.5
8 農協	20.0	21.7
9 友人	17.5	21.7
10 他出している子ども	35.0	34.8
11 福祉施設・福祉団体	2.5	6.5
12 その他	0.0	0.0
13 誰もいない	0.0	0.0
	(40)	(46)
累計	(96)	(116)

問10 よく遊びに行ったりお茶を飲みに行ったりする友人はいますか。いるとすれば、そのうち最も頻繁に行き来する友人はどのあたりに住む人ですか。1つお選びください。

	南七区	東七区
1 隣りの人	10.0	4.3
2 2～3軒隣りの人	5.0	17.4
3 徒歩で行ける程度の距離の人	35.0	28.3
4 同地区内であるが、車やバスで行き来する距離に住む人	12.5	10.9
5 他地区（さらに遠く）に住んでいる人	10.0	2.2
6 遊びに行ったりする友人はとくにいない	17.5	23.9
7 N. A.	10.0	13.0
	(40)	(46)

問11 隣近所のつきあいとしてはどんなことをしますか。しているつきあいすべてに○をしてください。

	南七区	東七区
1 盆・正月のつきあい	22.5	21.7
2 お中元・お歳暮等の持参	17.5	21.7
3 冠婚葬祭のつきあい	77.5	84.8
4 忙しいときの手伝い	20.0	21.7
5 ケガや病気の時の介護	12.5	4.3
6 困ったときの相談	30.0	15.2
7 日常茶飯事までお互いにつきあう	10.0	15.2
8 とくにつきあいはない	2.5	15.2
9 その他	2.5	2.2
	(40)	(46)
累計	(78)	(93)

問12 どのような近所づきあいが望ましいと思われますか。1つお選びください。

	南七区	東七区
1 挨拶や世間話をする程度で、互いの生活にはふみこまない	52.5	60.9
2 生活全般についていろんな話ができ、軽い頼み事もできる	30.0	30.4
3 家族同然のつきあい	5.0	0.0
4 なくても生活できるので、ない方がよい	0.0	2.2
5 N. A.	12.5	6.5
	(40)	(46)

問13 あなたは地域（小学校区や七区など）の祭りや盆踊りに行かれますか。（いくつでもお答えください）

	南七区	東七区
1 お世話したことがある	50.0	60.9
2 よく参加する（踊る・舞う）	12.5	8.7
3 たまに参加する	30.0	34.8
4 よく見に行く	35.0	45.7
5 行ったことがない	10.0	2.2
	(40)	(46)
累計	(55)	(70)

問14 地域社会の運営のあり方について、あなたは下記のどちらの考えに近いですか。

	南七区	東七区
1 住民どうしの和を大切に、あまり波風がたたないようにつとめる	47.5	56.5
2 住民どうしができるだけ意見を出しあい、住みよいまちとなるよう努力する	27.5	28.3
3 どちらともいえない	17.5	8.7
4 N. A.	7.5	6.5
	(40)	(46)

問15 あなたは全体的に見て、現在の自分の生活に満足していますか。

	南七区	東七区
1 非常に満足している	2.5	2.2
2 満足している	60.0	65.2
3 どちらでもない	22.5	19.6
4 やや不満	7.5	6.5
5 非常に不満	0.0	2.2
6 N. A.	7.5	4.3
	(40)	(46)

問 16 あなたの毎日の生活で何か不満に思っていることはありますか。不満に思うものすべてに○印をし、その中でとくに不満に思うもの1つに◎印をしてください。

	◎		○	
	南七区	東七区	南七区	東七区
1 自分や家族の健康	2.5	0.0	15.0	15.2
2 自由になる時間が少ない	0.0	0.0	5.0	8.7
3 収入が少ない	0.0	2.2	52.5	41.3
4 物価や税金が高すぎる	2.5	6.5	35.0	50.0
5 農作物の値段が安い	22.5	10.9	45.0	69.6
6 田や畑が家から遠い	0.0	0.0	0.0	8.7
7 減反率が高い	22.5	28.3	42.5	43.5
8 町が遠くて買い物などが不便	0.0	0.0	15.0	10.9
9 生活環境が悪い	0.0	0.0	2.5	4.3
10 あとつぎが決まっていない	0.0	0.0	7.5	17.4
11 子どもと一緒に暮らせない	0.0	0.0	7.5	4.3
12 仕事がかつい	2.5	0.0	7.5	15.2
13 家族関係	0.0	0.0	0.0	0.0
14 近所の人間関係	0.0	2.2	10.0	10.9
15 バスや電車の便が少ない	5.0	0.0	10.0	8.7
16 病院や医療施設が遠い	2.5	0.0	27.5	15.2
17 地域の人との交流が少ない	0.0	0.0	7.5	4.3
18 家事の負担が重い	0.0	0.0	5.0	2.2
19 とくになし	32.5	45.7	2.5	4.3
20 その他	0.0	0.0	0.0	0.0
	(40)	(46)	(40)	(46)
累計	—	—	(119)	(154)

問 17 今後、どのような暮らし方を希望しますか。1つ選んで○をつけてください。

	南七区	東七区
1 だれの世話にもならないで自立して暮らしたい	15.0	4.3
2 子どもたちと一緒に暮らしたい	37.5	60.9
3 老人ホームなどの施設で暮らしたい	10.0	2.2
4 子どもたち夫婦と顔をあわせられる距離に住んで暮らしたい	20.0	17.4
5 その他	2.5	6.5
6 N. A.	15.0	8.7
	(40)	(46)

問 18 今後、今以上に生活が不自由になったら、主にだれに世話をしてもらいたいですか。1つ選んで○をつけてください。

	南七区	東七区
1 配偶者（夫・妻）	37.5	30.5
2 子ども	7.5	13.0
3 子ども夫婦	35.0	39.2
4 嫁	0.0	6.5
5 兄弟姉妹や親戚	0.0	0.0
6 隣近所の人	0.0	0.0
7 老人ホームに入る	15.0	4.3
8 病院に入る	2.5	2.2
9 ホームヘルパー	0.0	0.0
10 その他	2.5	4.3
	(40)	(46)

IV. あなたのお住みの地区（南七区・東七区）のことについておうかがいします。

問 19 あなたのお住みの地区の住民は、他の干拓地と比べて人間関係は良好だと思いますか。

	南七区	東七区
1 思う	47.5	58.7
2 思わない	10.0	13.0
3 どちらともいえない	35.0	26.1
4 N. A.	7.5	2.2
	(40)	(46)

問 20 あなたは今お住みの地域に愛着を感じていますか。

	南七区	東七区
1 感じる	72.5	80.5
2 感じない	2.5	4.3
3 どちらともいえない	22.5	13.0
4 N. A.	2.5	2.2
	(40)	(46)

問 21 この土地では、じぶんは「よそ者」であると思いますか。

	南七区	東七区
1 思う	7.5	8.7
2 思わない	72.5	80.5
3 どちらともいえない	17.5	6.5
4 N. A.	2.5	4.3
	(40)	(46)

問22 あなたは（もし他の地域への移住が可能であったとしても）今後も、この地域に住みつづけたいと思いますか。

	南七区	東七区
1 思う	72.5	82.6
2 思わない	5.0	2.2
3 どちらともいえない	20.0	10.9
4 N.A.	2.5	4.3
	(40)	(46)